長岡京市文化財調査報告書

第55冊

２０１０

長岡京市教育委員会

編　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第55冊

２０１０

長 岡 京 市 教 育 委 員 会

編　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

（1）小泉川から見た伊賀寺遺跡（南西から）

（2）伊賀寺遺跡出土の平玉未製品と石材

序　　文

長岡京市は、古くは６世紀の前半に「弟国宮」が、８世紀後半には「長岡京」が当時の日本の都として置かれたところです。市域には恵解山古墳をはじめ多くの古墳群、乙訓寺や長岡天満宮等の神社仏閣が点在し、古い歴史と文化を感じさせるまちです。

近年、文化財をめぐる国の法律の施行や改正があいついでおり、長岡京市でも本年度「景観条例」を施行しました。まちづくりのなかで、地域の人々の心の拠り所となる文化財の存在は、欠かせないものとなりつつあります。今後、文化財を個々に守るだけでなく、文化財を含めたその地域全体の風土を守り育てることが、長岡京市独自のまちづくりを行っていくうえで重要であると考えています。

さて、長岡京市教育委員会では、下海印寺下内田、調子一丁目、奥海印寺西代の各地区において、平成21年度の国庫補助事業として発掘調査を実施しました。本書は、これら３つの地区において実施した発掘調査の成果をまとめたものです。長岡京市域の南西部にあたる下海印寺下内田地区では、碧玉製の玉の未製品などが出土し、この地が縄文時代後期の玉つくり場であった可能性を示唆する貴重な資料を得ることができました。また、奥海印寺西代地区では、今回の調査によって、この地区に遺跡が存在することが初めて確認され、西代遺跡と名付けられることになりました。

以上のような多大な成果をあげることができましたのも、ひとえに関係者各位、市民の皆様のご支援の賜物です。発掘調査にあたり数々のご協力をいただきました土地所有者の方や近隣の皆様方、ご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

平成２２年３月

長岡京市教育委員会

教育長　芦　田　富　男

凡　　例

1．本書は、長岡京市教育委員会が平成21年度に国庫補助事業として(財)長岡京市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査の概要報告である。調査対象地は第１図、付表１に示した。

2．長岡京跡の調査次数は、行政区分を越えて長岡京跡右京、長岡京跡左京ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）による旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。

3．長岡京跡の条坊名称は山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号（1992年）の復原に従った。なお、従来の復原は必要に応じて（　）を付けて示した。

4．本書に使用する地形区分は、とくに断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）に従った。

5．本文の(注)に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

6．長岡京跡に関する調査の場合、正式な遺構番号は調査次数＋番号であるが、本書では煩雑を避けるため調査次数を省略している。

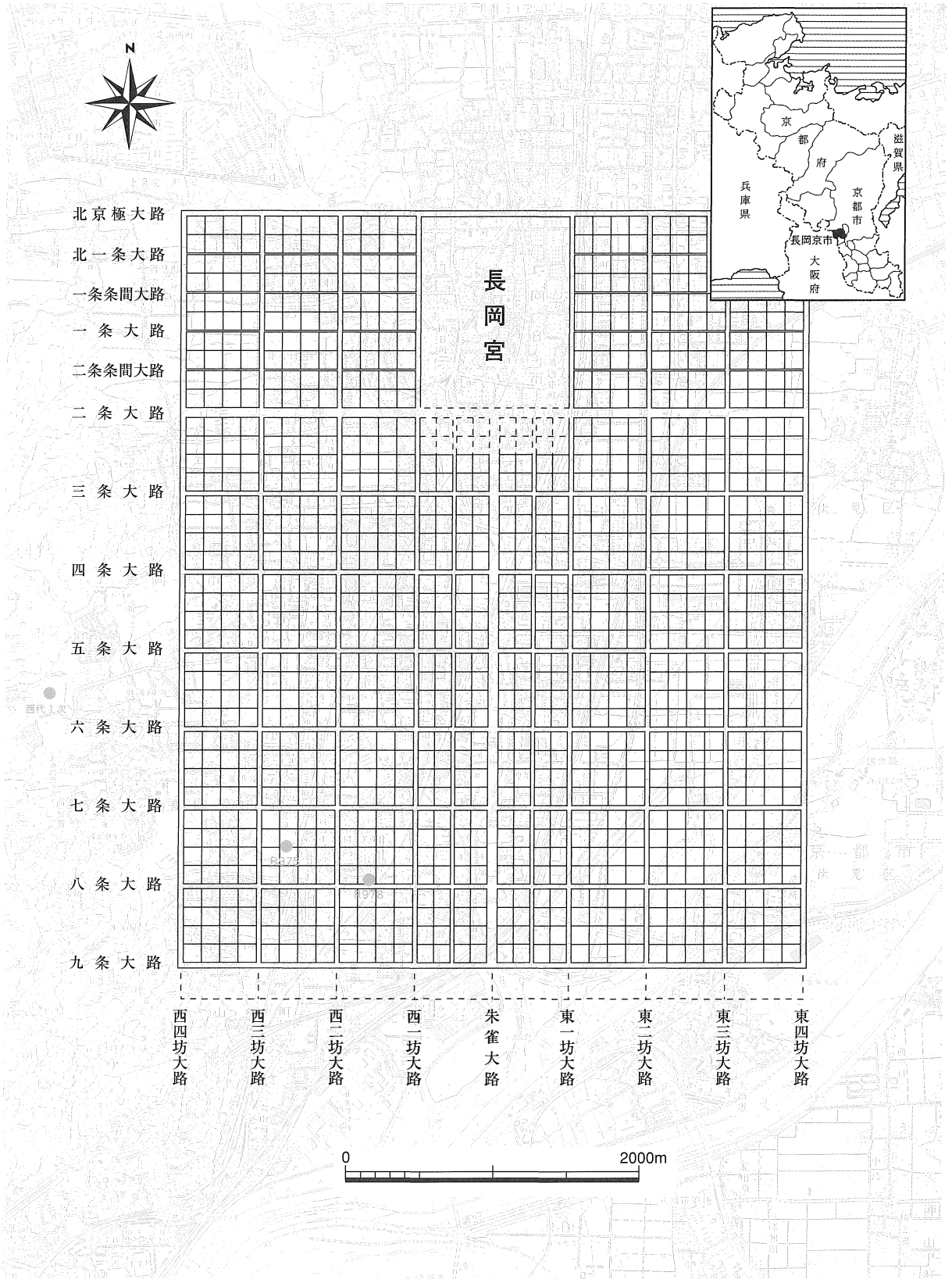
7．本書挿図の土層の色名は、基本的に『新版標準土色帳』（1997年版）を参考にした。

8．本書で使用した方位と国土座標値は、旧座標の第VI系にもとづいたものである。

9．本書は、各調査報告の執筆者は各章のはじめに記し、編集は(財)長岡京市埋蔵文化財センターの小田桐淳が行った。

付表－１　本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所　在　地	現地調査期間	調査面積	備　　考
長岡京跡右京第975次	7ANOOD-8	長岡京市下海印寺下内田 5-1、6-1	2009年６月10日～2009年８月18日	160㎡	伊賀寺遺跡
長岡京跡右京第978次	7ANROW-4	長岡京市調子一丁目13	2009年７月13日～2009年７月21日	30㎡	友岡遺跡
西代遺跡第１次	4LNPNI-1	長岡京市奥海印寺西代10	2009年５月18日～2009年６月３日	105㎡	



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本　文　目　次

第１章　長岡京跡右京第975次（７ＡＮＯＯＤ－８地区）調査概要

1　はじめに …… 1

2　調査経過 …… 2

3　検出遺構 …… 3

4　ま と め …… 4

第２章　長岡京跡右京第978次（７ＡＮＲＯＷ－４地区）調査概要

1　はじめに …… 5

2　調査経過 …… 6

3　検出遺構 …… 8

4　出土遺物 …… 9

5　ま と め …… 11

第３章　西代遺跡第１次（４ＬＮＰＮＩ－１地区）調査概要

1　はじめに …… 13

2　調査経過 …… 14

3　検出遺構 …… 14

4　出土遺物 …… 17

5　ま と め …… 18

図　版　目　次

巻頭図版

巻頭図版　（１）小泉川から見た伊賀寺遺跡（南西から）
（２）伊賀寺遺跡出土の平玉未製品と石材

長岡京跡右京第975次調査

図版１　（１）１トレンチⅡ面全景（西から）
（２）１トレンチの土層－床土層と第２層（南から）
図版２　（１）１トレンチⅢ面全景（西から）
（２）１トレンチの土層（南から）
図版３　（１）２トレンチⅡ面全景（東から）
（２）２トレンチの土層（南から）
図版４　（１）２トレンチⅢ面全景（西から）
（２）２トレンチの土層－地山礫層の落ち込み（南から）

長岡京跡右京第978次調査

図版５　（１）調査地全景（南西から）
（２）調査区全景（南から）
（３）柱穴Ｐ１（北から）
（４）出土銅製品

西代遺跡第1次調査

図版６　（１）調査地遠景（南から）
（２）調査地全景（北東から）
図版７　（１）調査地全景（北西から）
（２）調査トレンチ全景（南から）
図版８　（１）調査トレンチ全景（北から）
（２）出土遺物

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii

長岡京跡右京第975次調査

第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1
第３図　１トレンチ実測図（1/150）…… 2
第４図　２トレンチ実測図（1/150）…… 3

長岡京跡右京第978次調査

第５図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 5
第６図　調査区実測図（1/100）…… 7
第７図　出土遺物写真 …… 9

西代遺跡第１次調査

第８図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 13
第９図　調査地平面図（1/200）…… 15
第10図　トレンチ断ち割り北部（南西から）…… 15
第11図　トレンチ断ち割り南部（北西から）…… 15
第12図　トレンチ断面図（1/50）…… 16
第13図　出土遺物実測図（1/4）…… 17

付　表　目　次

付表－１　本書報告調査地一覧表 …… ii
付表－２　出土遺物破片計数表 …… 17
付表－３　報告書抄録 …… 19

第１章　長岡京跡右京第975次（７ＡＮＯＤＤ－８地区）調査概要

－長岡京跡右京八条三坊、伊賀寺遺跡－

１　はじめに

1　本報告は、2009年６月10日から８月18日まで、長岡京市下海印寺下内田５-１、６-１において実施した長岡京跡右京第975次調査の現地調査に関するものである。

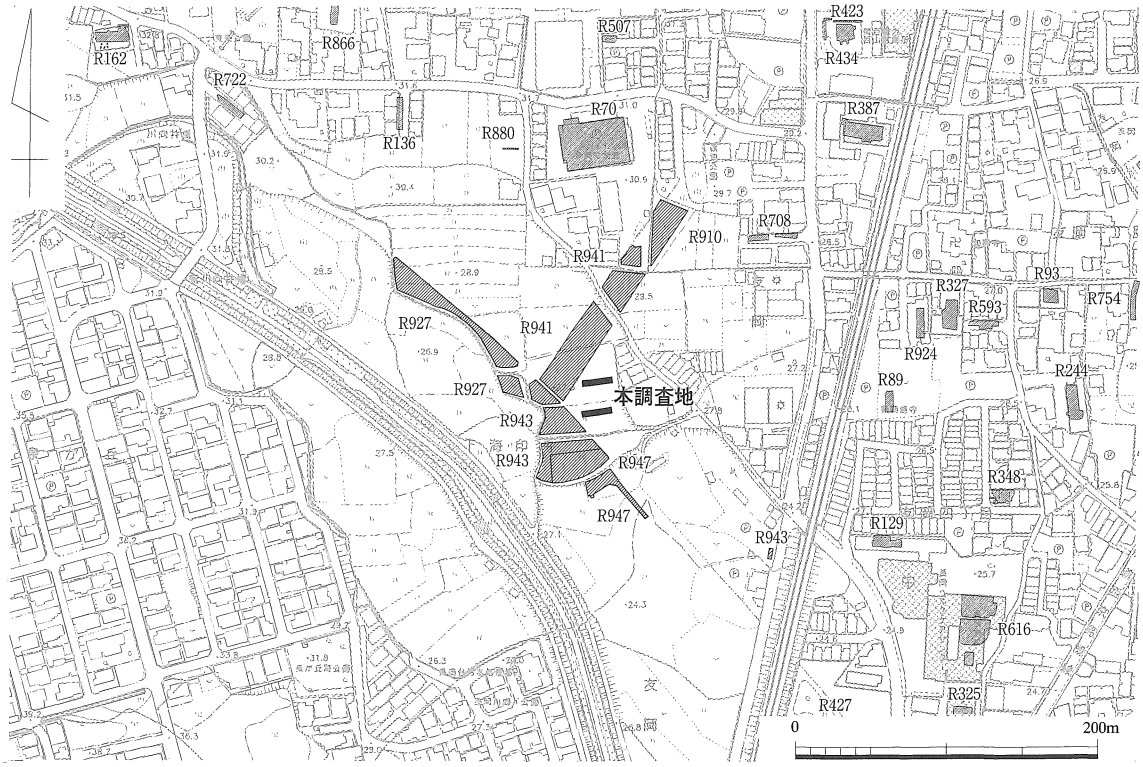
2　本調査は、長岡京跡右京八条三坊（八条条間小路、西三坊坊間西小路）および伊賀寺遺跡に関する考古学的な資料を得るために実施したもので、調査トレンチは２カ所に設定し、調査面積は合せて160㎡であった。

3　発掘調査は、平成21年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地での調査は同センター事務局長の小田桐淳が担当した。

4　発掘調査にあたっては土地所有者をはじめ、周辺の方々に様々のご理解とご協力を賜った。また発掘現場への出入りに際しては、京都府土木事務所から便宜を賜った。

5　調査では縄文時代の遺物が大量に出土したため、遺物の詳細については整理作業の終了を待って後日改めて報告する。

6　本文の執筆、編集は小田桐が行った。



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

2　調査経過

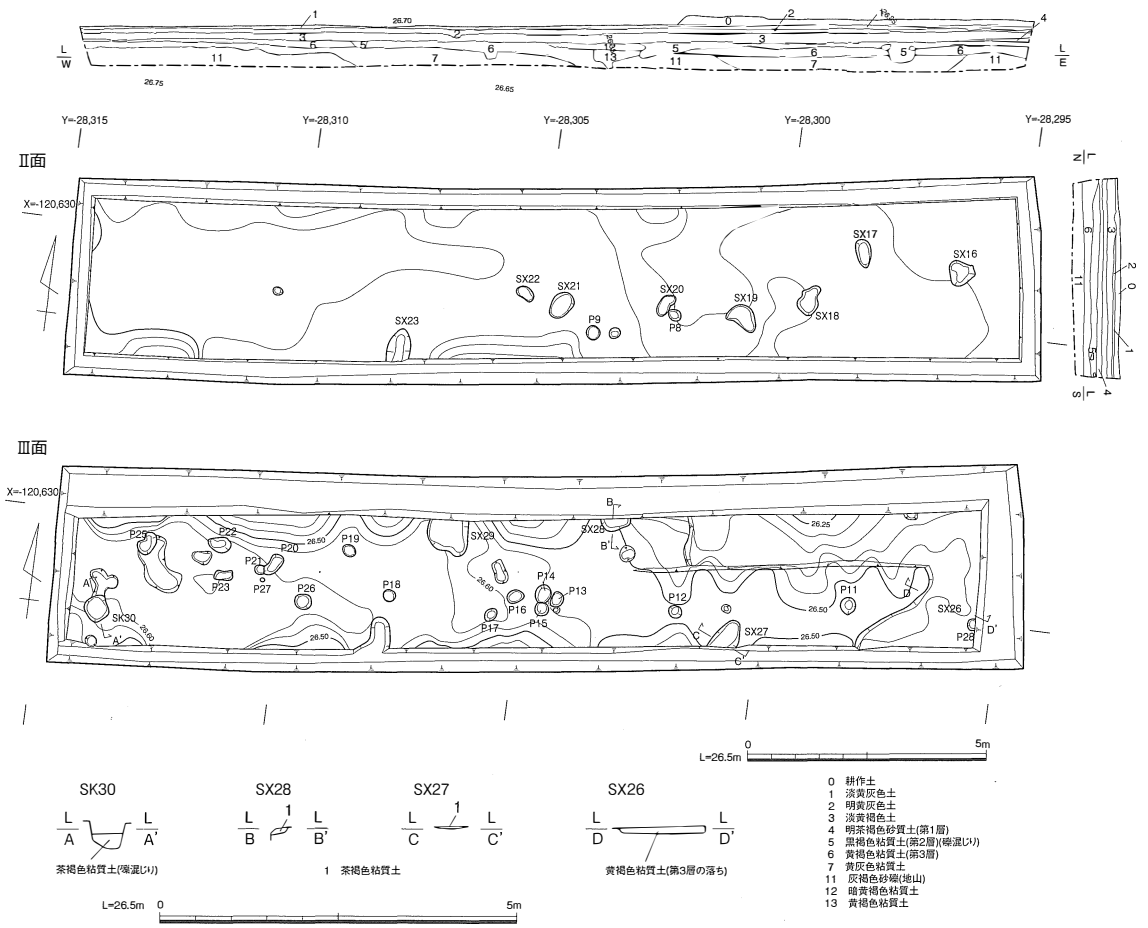
調査地周辺では、京都第二外環状道路建設事業および府道大山崎大枝線道路の改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターによって進められている。

これらの調査によって長岡京跡や伊賀寺遺跡に関する各時代の遺構・遺物が発見されてきた。特に縄文時代に関しては中期と後期の集落跡が検出され、竪穴住居や墓跡など遺構を伴う資料が良好な状態で見つかってきている。

調査地周辺は、前述の道路建設以外にも阪急京都線の新駅建設も始まっており、これらの施設が完成すると周辺の開発は加速度的に進展するものと思われた。そこで長岡京市教育委員会では、開発が本格化する前に遺跡の性格や広がりを押さえておくため、国庫補助事業としての確認調査を実施することになった。

調査地は小泉川左岸の河岸段丘端にあたるところである。調査地の南は水田１枚を隔てて小泉川氾濫原へと地形が落ちる段丘崖が存在している。また調査地の北東には、さらに一段段丘面が上がる崖が存在している。段差は氾濫原までが約－2.5m、上の段とは約＋１mの高低差である。

調査地は30cmほどの段差のある二枚の水田で、各水田面にトレンチを設定した。調査に際し、



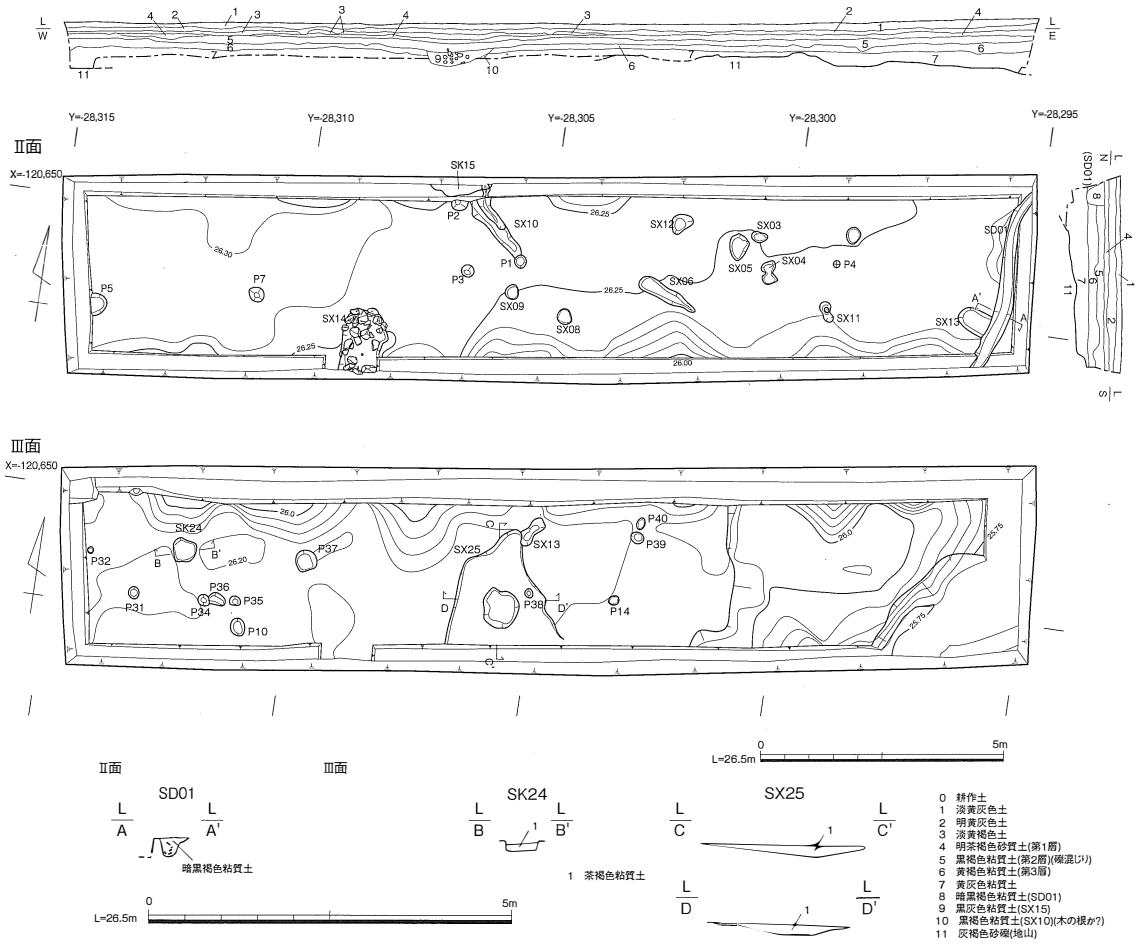
第３図　１トレンチ実測図（1/150）

水田面ごとに耕作土を寄せ集め、トレンチは床土面で設定した。重機掘削によって床土層を除去すると明茶褐色土と黒褐色粘質土の遺物包含層が現れたため、明茶褐色土の上面から調査を開始することにした。調査区の中心座標はＸ＝－120,640、Ｙ＝－28,305である。

3　検出遺構

調査地には耕作土の下に３層の床土層があり、その下に明茶褐色砂質土（第１層）が薄く堆積している。この層には縄文時代から歴史時代までの遺物が包含されている。遺構検出は第１層上面から開始したが、この面では遺構は検出されていない。

第１層の下には黒褐色粘質土層（第２層）が堆積している。この層には縄文土器、サヌカイト剥片、石鏃、磨石などの石器類などが多く包含されているが、一部で土師器片や須恵器片の出土も認められた。第２層上面（第Ｉ面）で遺構検出を行ったが、明確な遺構は検出できなかった。そこで、縄文時代遺物が多いことと、古墳時代以降の遺構が存在する可能性が考えられたことなどから、１ｍ四方毎に遺物を取り上げながら第２層を掘り下げた。第２層下面（第Ⅱ面）で確認されたＳＤ01およびＳＸ14は断面精査の結果、第Ｉ面から切り込まれていることが判明した。ほかに第Ⅱ面では地形の窪み、木の根状の輪郭のほかにＳＫ15や柱穴状の遺構が確認された。



第４図　２トレンチ実測図（1/150）

溝ＳＤ01は２トレンチ東端で検出された古墳時代後期の溝である。幅0.3m、深さ0.4mほどで蛇行している。ＳＸ13はＳＤ01に切られるが、同じく古墳時代の土師器甕が出土している。ＳＸ14は人頭大ほどの円礫が集積していたもので、第Ⅱ面で輪郭が検出された。縄文時代後期の集石墓となる可能性が高い。骨は底部で細片がわずかに出土したのみである。

第Ⅱ面に切り込む遺構としては縄文時代の土坑ＳＫ15がある。全容は２トレンチ北部に広がるため確認できていないが、直径1.3m以上、深さは0.3m以上ある。

第２層の下には黄褐色粘質土（第３層）が堆積している。この層から出土する遺物は縄文時代のもののみである。第３層下面（第Ⅲ面）ではＳＫ24、ＳＫ30、柱穴などが検出された。基本的に第Ⅱ面で検出された遺構の埋土は第２層、第Ⅲ面で検出された遺構の埋土は第３層である。

縄文時代の土坑ＳＫ24（２トレンチ）は、直径0.25mほどの不整円形で、深さが0.15mほどの土坑である。土坑ＳＫ30（１トレンチ）は一辺0.4mの隅円方形、深さ0.4mの土坑である。

第３層の下は黄灰色粘質土となる。断ち割りや第Ⅲ面の遺構検出では、黄灰色粘質土（第４層）からも量は少ないが土器が出土している。第４層の下は灰褐色砂礫であり、この層が地山層と考えられる。地山層は伏流水が流れる層となっており、大量の水が湧出していた。

第４層の状況は主に断ち割りによって調査したが、両トレンチで第４層が落ち込む部分を２カ所確認した。１トレンチから２トレンチにかけて自然流路状の窪みが２条通るものと思われる。

4　まとめ

今回の調査ではコンテナで27箱ほどの遺物が出土した。そのほとんどが縄文時代の遺物で、さらに縄文時代遺物の半数以上は石器類である。これらはほとんどが第２層と第３層から出土している。詳細は整理の終了を待って後日報告するが、ここでは概要を述べるに留めて本報告のまとめとする。

調査の結果、調査地からは３面の遺構確認面が検出され、縄文時代中期（北白川Ｃ式）、後期（一乗寺Ｋ式～宮滝式）の土器が出土している。第Ⅱ面と第Ⅲ面で検出された遺構は、主に後期の遺構と考えられ、中期の土器は第４層に多い。

本調査地の西および南での調査では、竪穴住居や墓跡が検出されているが、本調査地ではＳＸ14が墓跡と考えられる以外、竪穴住居などは検出されなかった。湧水などの条件や包含層中の遺物の多さを考えると、調査地は伊賀寺縄文集落の縁辺部にあたるものと考えられる。

出土した石器類の中で、大多数はサヌカイトの剥片であり、中でも数ミリの微細な剥片が多いこと、碧玉の平玉の未製品とその材料となった石材が複数出土していることから、当地が石器製作の現場ないし石材の捨て場であった可能性も検討する必要がある。また石鏃は200点以上出土しており、サヌカイトの産地は二上山と四国・金山のものが認められる。ほかに磨石、叩石、石皿なども複数出土した。

最後に、特殊な遺物としては、黒曜石の剥片、緑泥片岩の石棒なども出土している。また第２層上面から異形局部磨製石器が１点出土している。

第２章　長岡京跡右京第978次（７ＡＮＲＯＷ－４地区）調査概要

－長岡京跡右京八条二坊十二町、友岡遺跡－

１　はじめに

1　本報告は、2009年７月13日から７月21日まで、長岡京市調子一丁目13番において実施した長岡京跡右京第978次調査に関係するものである。調査面積は約30㎡である。地表面標高は、約20ｍの低位段丘Ｉにある。

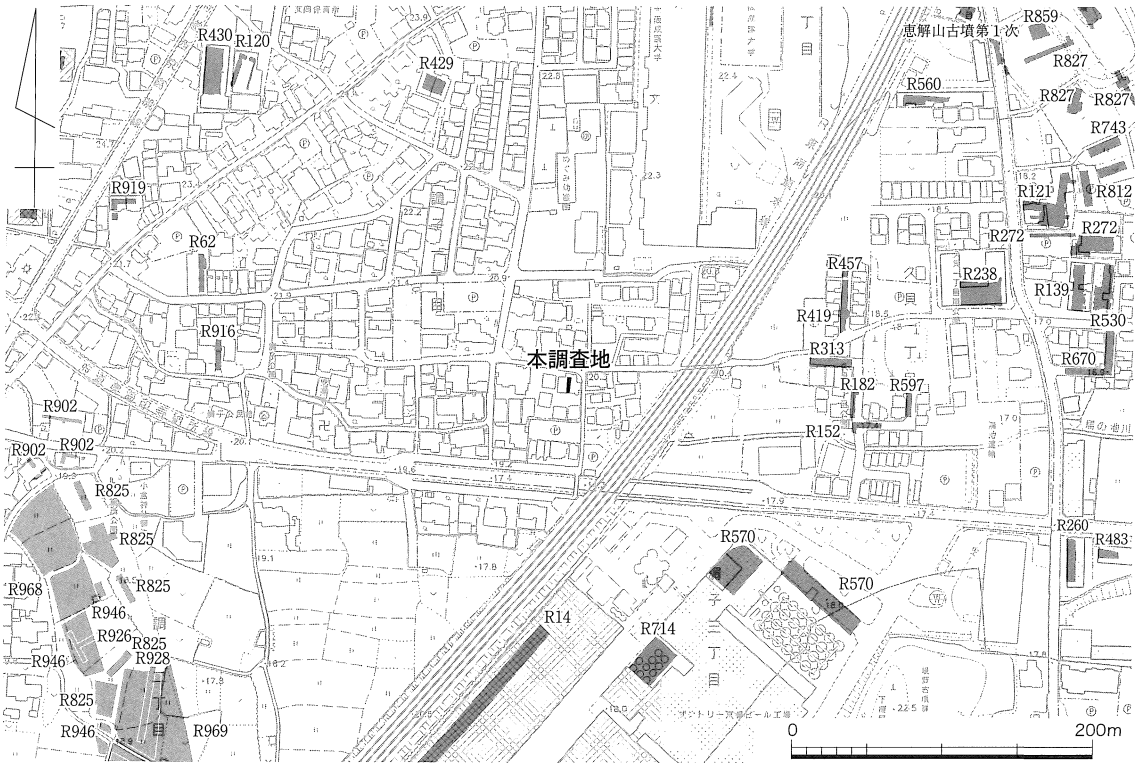
2　当地は共同住宅の建設予定地であるが、共同住宅内に営利行為と認められない土地所有者本人の居住スペースが含まれているため、国庫補助で試掘調査を行うこととなった。また、共同住宅建設に伴う発掘調査の協議は、その結果を踏まえて実施されることになった。

3　当調査地は、長岡京跡右京八条二坊十二町推定地であり、友岡遺跡、硲遺跡、南栗ヶ塚遺跡などにも近いことから、かかる遺跡の当地における状況を確認し、遺跡保存に必要な資料を作成する目的を持つ。

4　発掘調査は、平成21年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地での調査は同センター調査係総括主査の岩崎誠が担当した。

5　発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺の方々に種々のご理解とご協力を賜わった。

6　本文の執筆、編集は岩崎が行った。



第５図　発掘調査地位置図（1/5000）

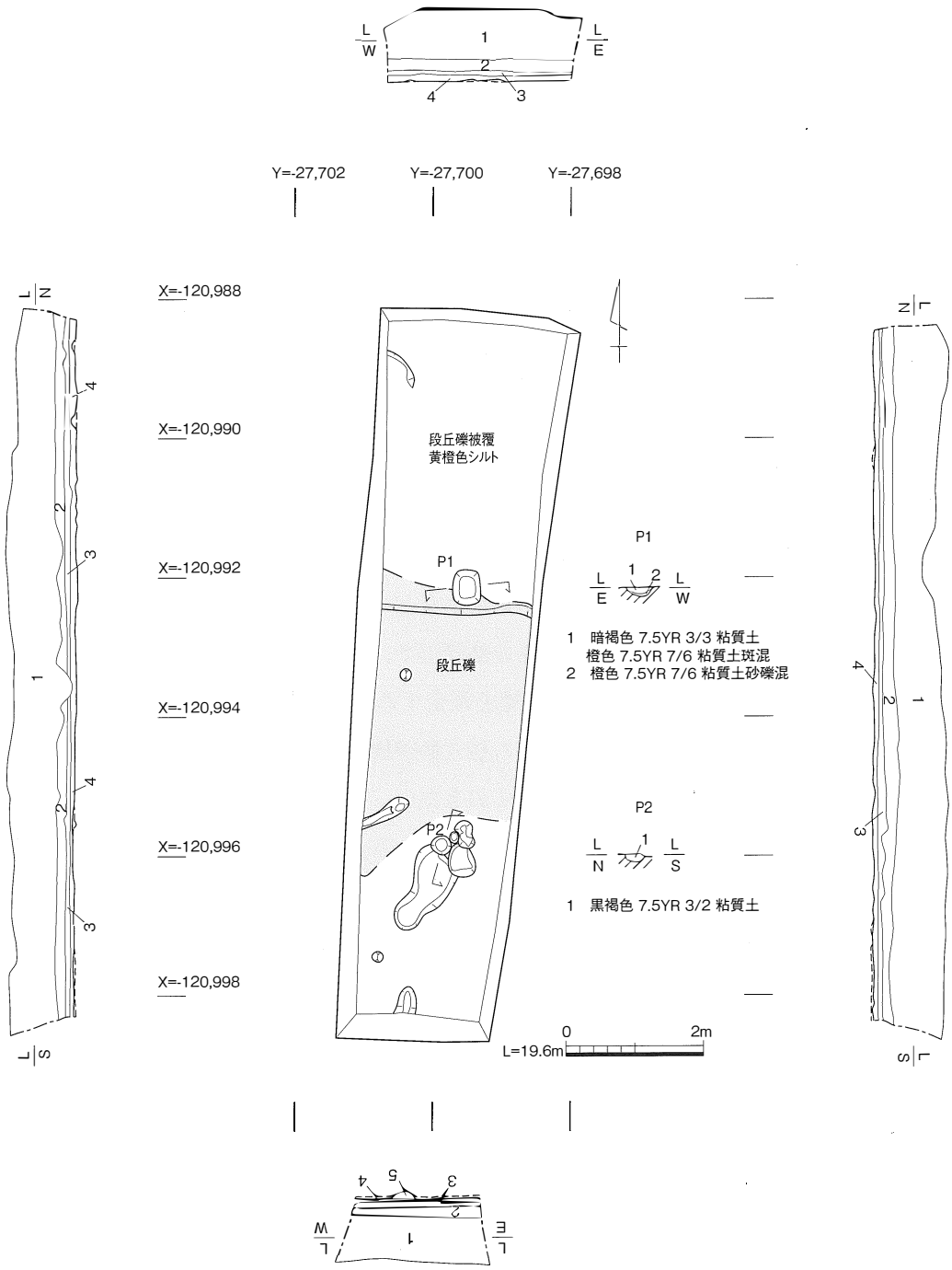
2　調査経過

今回の調査地付近の、これまで調査事例を振り返ると（第５図）、北西約250m地点で実施された長岡京跡右京第62次調査[注1]では、７世紀の竪穴住居や、10世紀頃の緑釉陶器を含む土坑などが検出されており、西約135m地点で調査された右京第916次調査[2]では、奈良時代の溝や縄文時代の土坑などが検出されている。北西約300mの地点で実施された右京第430次調査[3]では、縄文時代晩期の土器や古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥～奈良時代の建物群、平安時代の建物跡などが検出されている。南西方向では、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターにより京都第二外環状道路敷設に伴う友岡地区と調子地区の調査が平成16年度から続いて実施されており[4]、各時代にわたって大きな成果をあげつつある。南東方向に目を向けると、約150mにある右京第570次調査[5]地点では、旧石器が単純層で出土したほか、諸説ある第３次山城国府推定地の南栗ヶ塚遺跡説と関連する可能性が指摘される平安時代初頭の建物跡などが検出されている。東方約150m付近では、右京第419次調査や、その周辺の第121次、139次、272次、812次調査[6]などが実施され、平安時代初期の建物跡などが検出されており、軒瓦や錠前牡金具のほか、施釉陶器一括出土など、特殊遺物の出土とともに、当時重要な施設があった地域と言える。また、第５図の中に収まらなかった南東約350mでの右京第624次調査[7]では、弥生時代中期と古墳時代前期の竪穴住居群などが検出されている。弥生時代の住居群は、検出密度が高く、重複関係が著しい点、さらに出土遺物に銅剣形石剣や粘板岩製未製品が豊富であることなど、神足遺跡の実態と極めて類似している。この硲弥生集落遺跡の南方約500mで調査された長岡京跡右京第589次調査[8]では、弥生中期方形周溝墓群が広い範囲で検出されている。

このような周辺部での調査成果がある中で、当調査地隣接箇所での調査はなく、かかる遺跡の状況は、推定しにくい状況にあった。そこで、長岡京跡をはじめとした周辺遺跡に関連する遺構や遺物の有無、またその残存状況を把握する必要があった。またその成果を基に、当地の共同住宅建設に伴う発掘調査の協議が実施されることになった。

調査は、共同住宅予定位置の北東隅部に、東西幅約３m、南北長約10mの長方形調査区を設定しておこなった（第６図、図版５（１））。掘削作業は、調査区北部から着手した。北端部で、先ず宅地造成盛土を除去していく過程で、調査前にあった既存家屋を支えていたコンクリート製杭が２m等間で南北に列んで打ち込まれていることが分かった。造成盛土を除去した段階で、宅地化前の水田耕作土が厚さ10cm前後のほぼ水平堆積として確認できた（第３層）。この耕土下には、黒褐色の鉄分が沈澱した灰色層を看取し（第４層）、この層の上面まで重機で除去し、以下を本格的な調査対象とした。先ず第４層上面での遺構検出作業を行ったが、数カ所で窪みが検出されたのみで、目的をもって掘られた遺構は存在しなかった。このため第４層を除去することにして、掘削を開始している過程で、この層が江戸時代の遺物包含層であることが明らかになった。

尚、当調査区の中心座標は、国土座標第Ⅵ系で、およそX＝－120,993、Y＝－27,700に位置する。地表面標高は約20mであった。



1　明黄褐色(10YR7/6)砂礫(盛土1)
2　橙色(7.5YR7/6)粘質土
　にぶい褐色(7.5YR6/3)粘質土
　オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト　} 斑混(盛土2)
3　オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト(旧水田耕土)
4　灰色(5Y5/1)シルト
　黒褐色(7.5YR3/2)鉄分多混　(江戸期包含層)
5　黒褐色(7.5YR3/2)粘質土

第６図　調査区実測図（1/100）

3　検出遺構

第４層を除去した段階で、遺構検出作業を行ったところ、北から約3.5mから４mまでが砂や礫をほとんど含まない黄橙色系のシルト層になり、以南約３～4.5mまでは主に拳大以下の亜角礫からなる礫層が帯状に見られ（第６図網掛け表現部分）、以南は５㎝以下の亜角礫砂利が黄橙色系シルトに混じる堆積面をなしていた。このような３層からなる土層上面は、礫層面が５㎝程度盛り上がっている特徴があるほか、ほぼ水平面を成し、標高は約19mであった。北部のシルト層と中央部の帯状礫層との境には東西方向の僅かな段差が設けられ、その段部に浅い溝状窪みが見られた。他にも窪みや浅く段状に傾斜する部分も見られたが、それらには固有の埋土はなく、第４層が連続して埋まっている状況であり、層位関係と出土遺物から、17世紀頃の田畑に開墾される際の遺構群と考えられる。

他に、同じ遺構検出面から、明らかに固有の埋土をもつものが検出できた。第６図Ｐ１とＰ２およびＰ２付近の土坑状や溝状の遺構群がそれである（図版５（２））。

Ｐ１（図版５（３））は、隅円方形平面をもつ柱穴掘形と考えられる。各辺は、ほぼ南北軸に並行または直交するもので、長岡京期前後の建物跡などの柱穴掘形に類似する。東西約40㎝、南北約50㎝、深さ約10㎝を測る。埋土は暗褐色の粘質土で、埋土から須恵器甕の体部細片が１点出土した（第７図２）。この１点で当遺構の時期を確定することは難しいが、京都第二外環状道路敷設に伴う調査で、奈良～平安時代にかけての柱穴群が検出されている成果から、当遺構も長岡京期と限定することはできず、律令期頃としておきたい。

Ｐ２は、直径約25㎝の円形掘形をもつ柱穴状遺構である。深さ約10㎝を測る。埋土は黒褐色の粘質土で、出土遺物はなかった。この調査に続いて実施した長岡京跡右京第979次調査で検出した遺構の内、中世の円形掘形柱穴群の埋土とは明らかに異なる。また、その調査では、古墳時代終末期の竪穴住居なども検出していることから、飛鳥時代以前の所産である可能性があるものの、確定はしかねる。

その他の検出遺構では、柱穴状遺構Ｐ２と重複関係にある土坑状遺構群は、柱穴状遺構Ｐ２により削られているものが多く、それより古い掘り込みと考えられる。また、調査区南部で検出した南辺や西辺にかかる溝状遺構群は、Ｐ２やそれと重複関係にある土坑群と埋土が類似している。いずれも断面「U」字形で、最深部の深さは約10㎝を測る。

調査区北部の遺構検出面基盤層を構成しているシルト層は、神足遺跡（長岡京跡右京第807次調査[9]）や硲遺跡（長岡京跡右京第570次調査[10]）で検出されている旧石器単純包含層と類似した土色・土質であるため、細心の注意を払いながら掘り下げたが、深さ約20㎝までに遺物はなく、無遺物層であることを確認した。また調査区中央部に帯状に見られた礫層は、北部のシルト層下に潜り込んでいくことも確認できた。この層位関係から、シルト層からの出土遺物はなかったが、調査区中央部の礫層を段丘礫と考え、北部のシルト層は、段丘礫を被覆する旧石器時代頃の堆積層と思われる。

4　出土遺物

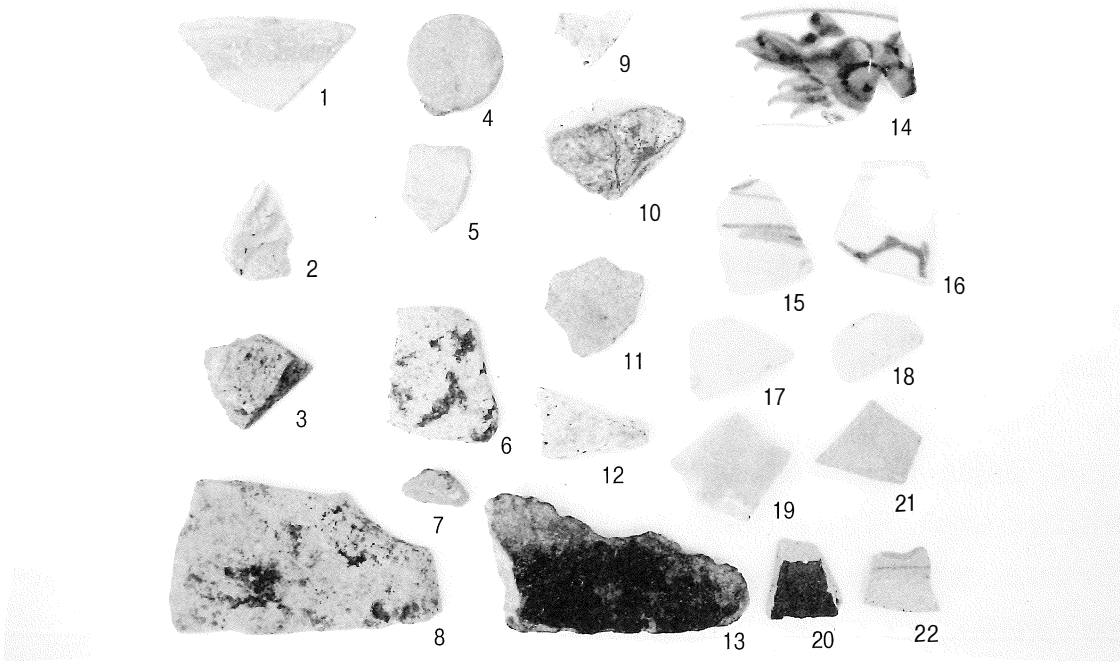
当調査からの出土遺物には、土器や瓦類（第７図）と金属製品（図版５（４））などがある。そのほとんどが、第４層からの出土である。土器類からは、古墳時代、奈良～平安時代、鎌倉時代、江戸時代の５期に分けることができる。

（１）古墳時代の遺物

古墳時代の土器類には、土師器甕（６・７）と須恵器甕（３）がある。いずれも第４層から出土した。６は、約３㎝×約2.5㎝、厚さ約0.3㎝の小片である。外面浅黄橙色7.5Ｙ8/6、内面暗灰色ＯＮ3/0に焼き上がった体部片で、きめ細かい粘土に透明の石英や長石などの白色砂粒が含まれている。内外面の剥離が著しく、調整手法は観察できない。７は、約1.5㎝×約0.8㎝、厚さ約0.5㎝の細片である。色調は橙色7.5Ｙ6/6で、胎土に長石などの白色砂粒が含まれている。３は、約2.3㎝×約２㎝の細片で、厚さ約0.8㎝を測る。外面平行タタキ、内面同心円当て具痕が残る。色調は灰色0Ｎ5/0で、長石などの白色砂粒を少し含み、黒色溶解物質が斑点状に僅かにある。

（２）奈良～平安時代の遺物

この時期の遺物には、須恵器の盤（１）・蓋（４・５）・甕（２・８）、緑釉陶器碗皿類（11）、灰釉陶器壺（12）などがある。この内1・4・5は奈良時代、８・11・12は平安時代の所産と考えられる。３が柱穴状遺構Ｐ１から、その他は第４層から出土した。１は、口縁部残存幅約４㎝、高さ約２㎝、厚さ約0.3㎝の小片で、口縁部のアールから盤と判断した。灰色ＯＮ5/0～4/0の色調で、胎土に長石などの白色砂粒を少し含む。２は、約2.7㎝×約２㎝の細片で、器壁の厚さは約0.7㎝ある。色調が灰白色の胎土に、細かい黒色溶解物質や白色砂粒が混じる。外面調製は残存度が悪く分からないが、内面には同心円当て具痕が深く明瞭に残る。４は直径約２㎝、高さ約



第７図　出土遺物写真

0.5㎝のつまみ部をもつ蓋の破片である。つまみ上面は、僅かに窪む。つまみ接合部の天井部器壁は、厚さ約0.35㎝である。５は、蓋の口縁部で、口縁部残存幅約1.3㎝、口縁部からの天井部残存幅約２㎝、器壁厚さ約0.4㎝の細片である。天井部から口縁部への移行は屈曲せず、滑らかに傾斜して端部を下方に肥厚させる。色調は灰色ＯＮ6/0である。８は、約６㎝×約3.3㎝、器壁の厚さ約0.8㎝の甕体部片である。外面に粗い擬格子目タタキを浅く残し、内面には丁寧なナデ調整を施している。色調は灰白色ＯＮ7/0で、砂粒の少ない胎土に黒色溶解物質が斑点状に僅かに見られる。11は、幅約2.3㎝、高さ約２㎝、器壁の厚さ約0.3㎝の細片で、明オリーブ灰色2.5ＧＹ7/1に発色した須恵質の素地に、浅黄色7.5Ｙ7/3に発色した鉛釉が内外面に薄くかかる。素地には白色砂粒が含まれている。12は横幅約2.5㎝、高さ約2.5㎝、器壁厚さ約0.5㎝の細片である。灰白色10Ｙ8/1の素地の外面に、オリーブ灰色10Ｙ6/2に発色した薄い釉がかかる。素地には、細かい黒色の溶解物質が斑点状に見られる。

（３）鎌倉時代の遺物

鎌倉時代の土器には、瓦器椀（９・10）がある。いずれも第４層から出土した。９は、幅約２㎝、高さ約1.3㎝、器壁厚さ約0.25㎝の口縁部細片である。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。内外面の調整は、観察できない。器壁の薄さや、口縁端部の処理などの特徴から13世紀頃の所産と考えられる。10は、約3.4㎝×約2.2㎝、厚さ約0.4㎝の底部近くの小片である。器壁の厚さから、９より古い型式になる可能性があるが、内外面の調整が分からず、口縁部の特徴も不明であることなどから、詳細は分からない。

（４）江戸時代の遺物

江戸時代の遺物には、伊万里焼碗（14～19）、瀬戸焼碗（20）、唐津焼皿（21・22）、平瓦（13）、銅製品（23）がある。いずれも第４層から出土した。第４層からのこれらの出土遺物から、同層出土の中世以前の土器群が、近世の攪拌層への混入であることが分かる。

伊万里焼には、染付碗（14～16）や青磁碗（19）がある。14の外面に描かれた草花文は、明るく鮮明に青く発色し、口縁部内面にも文様帯をもつ。15の染付は、くすんだ青色に発色している。19の青磁は、やや灰色がかった半透明青色の厚い釉が内外面にかかる。いずれも、口縁部およびその付近の器壁は、厚さ0.2㎝前後、高台近くの底部付近の器壁厚さは0.5㎝前後である。装飾に粗製化の兆しが見られるが、高台がやや高く円筒状に立ち上がり、口縁部を直線的に広げる広東碗の形態はない。このことから、第４層の攪拌時期は、17世紀後半代におさまる可能性がある。

20は、茶色く発色した釉薬が内外面に厚くかかる。21は、浅黄灰色に発色した灰釉が薄くかかる。

23は、直径0.6～0.7㎝の銅製品残片で、円盤状の現状ではあるが、周縁部に残存面はなく、製品名は分からない。厚さは約0.1㎝で、両面とも平坦面を成す。表面は、明るい青色の青錆で覆われており、保存状態はよくない。第４層から出土したことからここに含めたが、同層に古代の遺物も攪拌混入していることから、古代から近世の銅銭の細片である可能性がある。

5　まとめ

当調査では、奈良～平安時代に収まる柱穴状遺構Ｐ１などを検出したほか、古墳時代や鎌倉時代の遺物散布が確認でき、さらに、地形の大規模な改変がおこなわれた時期は江戸時代であろうと推察できる成果を得た。

当調査区における現在の宅地化以前に水田であったことは、既に知られていたことであったが、今回の調査で、それを示す堆積が確認できた。その水田耕作土直下にある堆積には、江戸時代の遺物が包含されており、17世紀代に田畑として開墾され、鎌倉時代以前の堆積を削平・攪拌して地形を大きく変えていったであろうことも明らかになった。

当調査では、このような中世以前の土層攪拌を受けながらも、古代の所産と考えられる遺構が現在まで残存していることを明らかにすることができた。中でも、柱穴状遺構Ｐ１の検出は、明確な遺構と認識でき、当調査地や周辺部に、古代の遺構が残存している可能性が大きいと判断でき、この柱穴状遺構に関連する遺構が周辺部に残存している可能性があると思われた。また当該期の遺跡のあり方については、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施している京都第二外環状線敷設に伴う発掘調査の内、長岡京跡右京第851次調査調子地区第１トレンチで、奈良～平安時代の柱穴群が検出されている[(11)]ことも興味深い。この調査成果との関連も考慮する必要があろう。

今回の調査では、江戸時代の土層に、鎌倉時代や古墳時代の遺物が包含されていることが明らかになった。この事実は、遺構の検出こそできなかったが、当地および周辺部が、それらの単なる遺物散布地にとどまらず、当該期の遺跡が広がっている可能性を示唆していると考えられるにいたった。調査経過でも触れたように、当調査地の西方では、古墳時代の集落遺跡である友岡遺跡が所在し、この遺跡の広がりが当調査地にまで及んでいる可能性が指摘できる。

また平安時代の緑釉陶器の出土は、たとえ１点の出土であったとは言え、西方に広がる平安時代の特異な遺跡として注目されている南栗ヶ塚遺跡との関連も想起できる。

鎌倉時代の遺物散布についても、近在する友岡遺跡などの他、右京第926次調査と右京第928次調査でも、中世柱穴群が検出されている[(12)]ことをふまえて、検討する必要がある。

このようなことから、当地およびこの周辺部における開発行為にあたっては、今回の成果をふまえて、遺跡を保存する施策が必要であると判断された。

当調査では、遺構密度が希薄であったり、遺物出土量が少なかったとはいえ、貴重な成果をあげることができた。この成果を基に、土地所有者および関係各社と協議の上、深いご理解とご協力により、当地の共同住宅建設に伴う発掘調査を、長岡京右京第979次調査として実施した。この調査では、古墳時代終末期の竪穴住居や鎌倉時代の柱穴群などを検出することができた。詳細については、（財）長岡京市埋蔵文化財センター年報の平成21年度に掲載予定である。今後、当調査成果も含めて、京都第二外環状線敷設工事に伴う調査成果や、友岡遺跡・南栗ヶ塚遺跡・硲遺跡など周辺部遺跡との関わりを加味した検討が課題と言えよう。

注１）山本輝雄「右京第62次調査概要」『長岡京市報告書』第12冊　1984年

２）小田桐淳「右京第916次調査概報」『長岡京市センター年報』平成19年度　2009年

３）岩崎　誠「右京第430次調査概報」『長岡京市センター年報』平成５年度　1995年

４）－１　長岡京跡右京第825次調査

岩松保・竹井治雄他「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第118冊　2006年

－２　長岡京跡右京第851次調査

増田孝彦・岩松保・戸原和人他「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第124冊　2007年

－３　長岡京跡右京第902・926・928次調査

竹井治雄・戸原和人・中川和哉他「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第131冊　2009年

５）原　秀樹「右京第570次調査概報」『長岡京市センター年報』平成９年度　1999年

６）岩崎　誠「右京第121次調査概要」『長岡京市センター報告書』第１集　1984年

木村泰彦「右京第139次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和58年度　1984年

小田桐淳「右京第272次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和62年度　1989年

木村泰彦「右京第419次調査概報」『長岡京市センター年報』平成４年　1994年

木村泰彦「右京第812次調査概報」『長岡京市センター年報』平成16年度　2006年

７）中島皆夫「右京第624次調査略報」『長岡京市センター年報』平成10年　2000年

８）石井清司・竹下士郎・中村周平・藤井整「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成10年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第90冊　1999年

石井清司・藤井整・河野一隆他「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成13年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第105冊　2002年

９）岩崎　誠「長岡京跡右京第807次調査概要」『センター報告書』第43集　2005年

10）前出　注５）に同じ

11）前出　注４）－２に同じ

12）前出　注４）－３に同じ

第３章　西代遺跡第１次調査（４ＬＮＰＮＩ－１地区）調査概要

１　はじめに

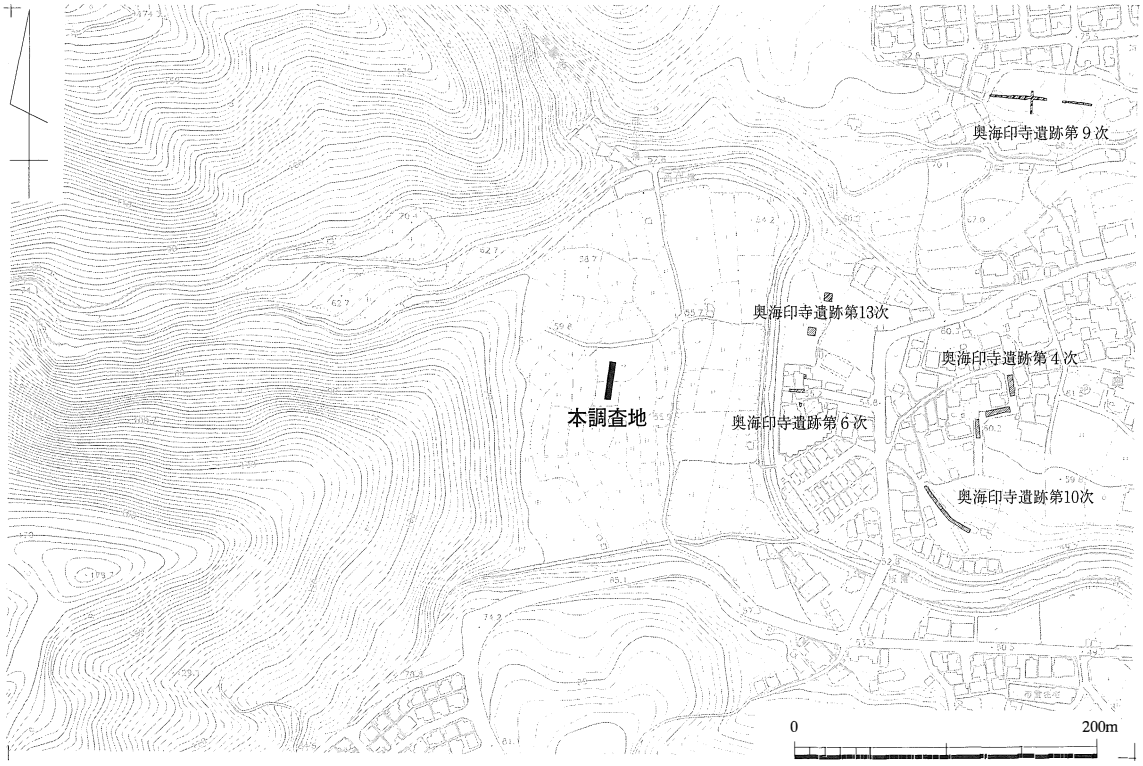
1　本報告は、2009年５月18日から2009年６月３日まで、京都府長岡京市奥海印寺西代(にしんだい)10番地において実施した西代遺跡第１次調査に関するものである。

2　上記の西代地区は本来は長岡京域外であり、さらに周知の遺跡にも該当しない場所であったが、京都第二外環状道路建設に伴い大規模な造成が行われることとなり、周辺において何らかの遺跡が存在する可能性があったため、発掘調査を実施することとなった。このため広大な水田地帯のほぼ中央付近に、２枚の水田にまたがって幅約４ｍ、長さ25ｍの南北方向の矩形トレンチを設定した。調査面積は105㎡である。

3　調査の結果、明確な遺構は検出されなかったものの、遺物包含層の存在が確認されたところから、今回新たに地名をとって「西代(にしんだい)遺跡」とし、第１次調査として報告するものである。

4　発掘調査は、平成21年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター調査係主査の木村泰彦が担当した。

5　本報告の執筆・編集は木村が行った。



第８図　発掘調査地位置図（1/5000）

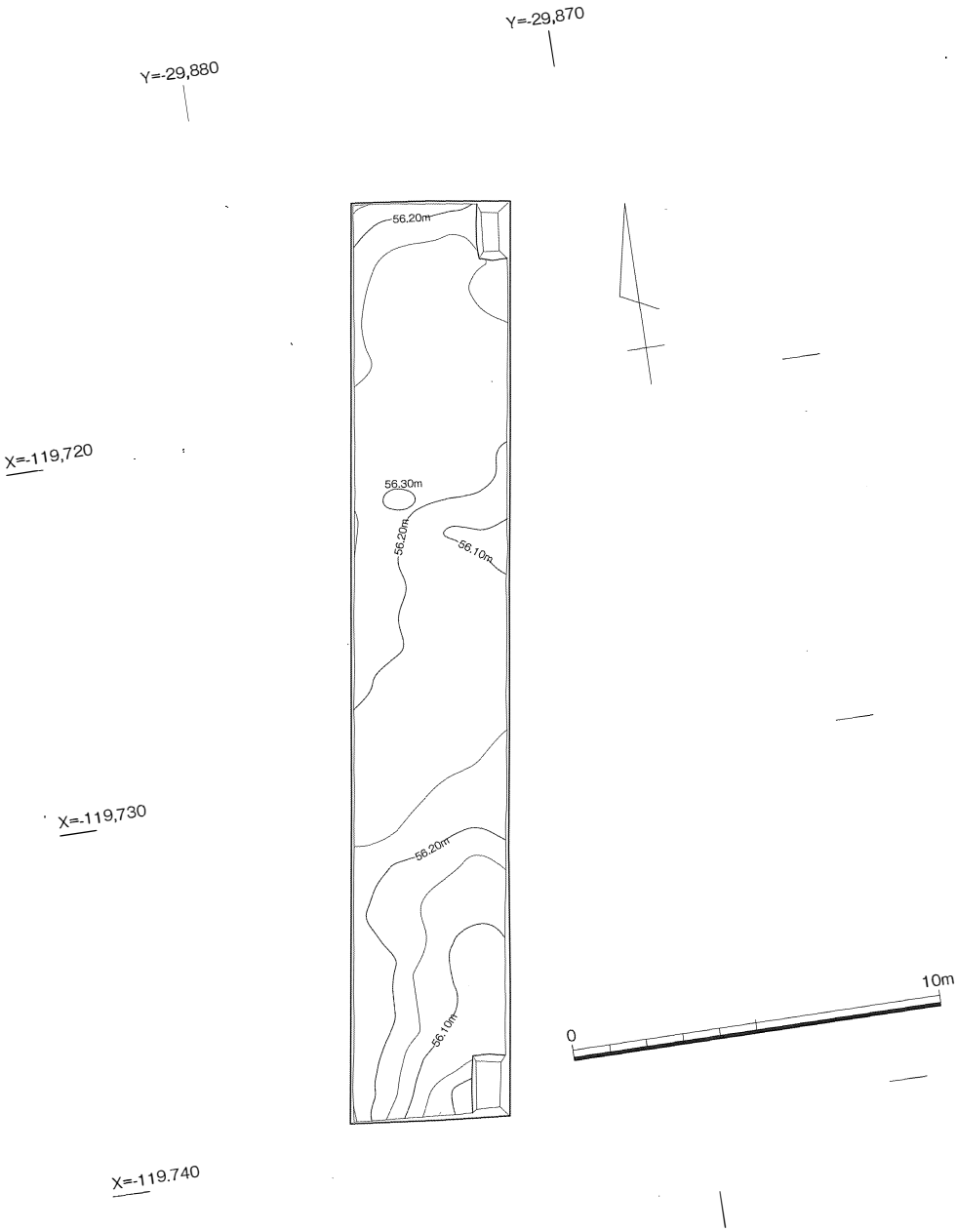
2　調査経過

今回の調査地は小泉川の源流近く、奥海印寺西代（にしんだい）にある水田地帯に位置している。当地は西山丘陵から東に伸びた丘陵の先端部にあたり、調査地のすぐ北側には渓谷部分から流れ出た小泉川が東流し、北東部分でほぼ直角に南に流れを変えたのち、緩やかに南東に向きを変えて平野部へと流れ出ている。周囲は三方を山に囲まれ、東側は小泉川によって深く刻まれた谷を隔てて奥海印寺の集落が広がる低位段丘Ⅰとなっている。この水田部分は小泉川流域で最も上流に位置しており、南北約240m、東西約160mの北東がやや広がる台形状を呈している。ほぼ中央には南北方向の農道が走っており、それを境に西側が低位段丘Ⅱ、東側が約２m近くの段差を持った小泉川の氾濫原Ⅰとなっている。今回の調査地は低位段丘Ⅱのほぼ中央にあたる。水田は南北に細長く、約30～50cmの段差を持って東に低くなっている。畦の形状は南半部分で緩やかに西側に入り込むように湾曲しており、この部分が谷状となっていたことを窺わせる。すぐ西側の水田部と丘陵部の境は南北方向に直線的に削平されており、南側も同様に東西方向に直線的である。なおこの水田以外の丘陵部分は、現在ほとんどが竹林としての利用がなされている。

西代地区はこれまで遺跡等としての認識はなされていなかったが、冒頭でも述べたように京都第二外環状道路建設に伴い大規模な造成が行われることとなったため、考古学的資料を得るために発掘調査を実施することとなった。これまでに周辺で行われた調査としては、当地の東120mで行われた奥海印寺遺跡第６次[注1]・第13次調査[2]があるが、いずれも氾濫堆積が確認されたにとどまり、明確な遺構・遺物は検出されなかった。ただ東側に存在する奥海印寺の低位段丘南側部分は小泉川が作り出した段丘崖が天然の要害となっており、「城」等の地名から中世城館の存在が推定される土地でもある[3]。このためこれらの関連施設の広がりも推定された。さらに上述の如く、当水田地域と丘陵部の境は直線的で、かつほぼ東西、南北方向を向くことから、水田として開墾されるよりも以前に何らかの開発が行われていた可能性も考えられる所であった。調査トレンチは前述の如く水田部分のほぼ中央付近にある南北２枚の水田を跨ぐように幅約４m、長さ25mの南北方向の矩形トレンチを設定した。調査は小型の重機で水田耕作土と床土までを除去し、その後は人力によって掘り下げを行った。その結果、遺物包含層の存在が確認されたことから、今回「西代（にしんだい）遺跡」として報告を行うこととなった。なお周辺の標高は、北側の水田上面で57.5m、南側の水田上面で56.0m、調査区の中心座標はX＝－119,725、Y＝－29,875である。

3　検出遺構

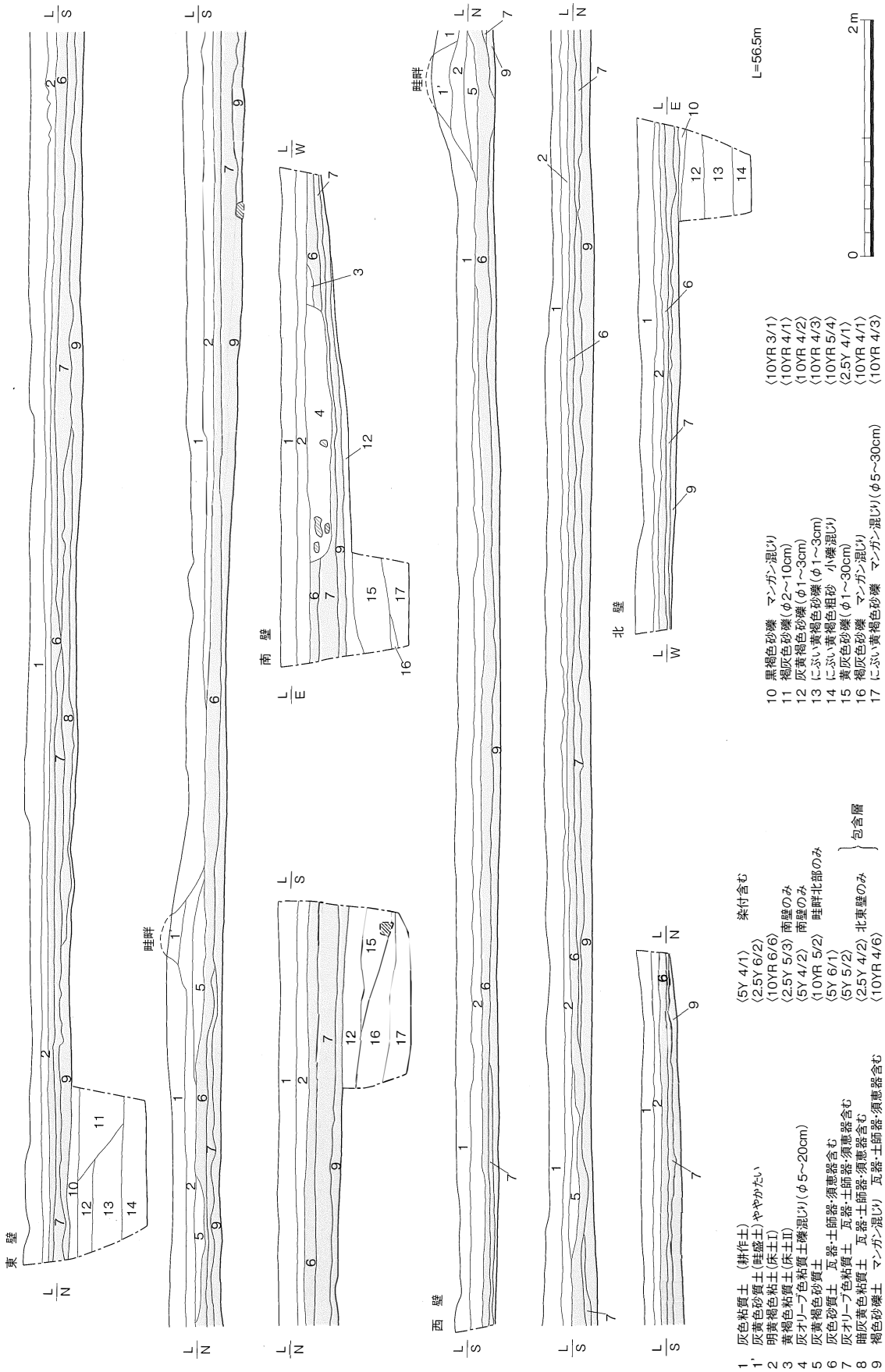
調査地における基本層序は、南北の水田ともに厚さ約0.15mの耕作土（第１層）、と厚さ約0.1mの床土（第２層）があり、その下に灰色砂質土（第６層）、灰オリーブ色粘質土（第７層）、暗灰黄色粘質土（第８層）、褐色砂礫土（第９層）の薄い遺物包含層が堆積していることが確認された。各層は比較的明瞭に区別されるが、暗灰黄色粘質土（第８層）のみは調査トレンチ北東に部分的に堆積するもので、掘り下げ時には灰オリーブ色粘質土（第７層）と同時に遺物を取り上



第９図　調査地平面図（1/200）

第10図　トレンチ断ち割り北部（南西から）

第11図　トレンチ断ち割り南部（北西から）



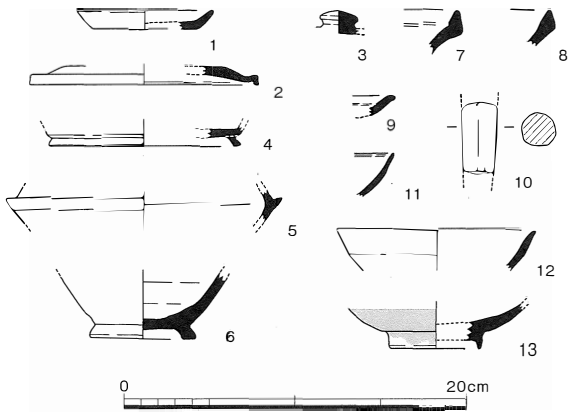
第12図　トレンチ断面図（1/50）

げている。これらを除去すると、北半部ではマンガン混じりの黒褐色砂礫（第10層）、南半部では灰黄褐色砂礫（第12層）のいずれも比較的堅く締まった層に至る。この面は、北半部ではほぼ平坦であるが、南半部では緩やかに北西から南東方向に傾斜しており、遺物包含層である第６～９層もこれに対応して南東部に向かって堆積が厚くなっている。この地形の傾斜状況は、周辺の水田の畦の方向と一致していることから、旧地形を反映したものと見られる。この面での標高は、最も高い北半部中央で56.3m、最も低い南東部で56.0mである。またこれらを埋めている第６～９層の上面での標高は、北側で56.55m、南側で56.40mである。第６～９層を除去した段階で平面精査を行ったが、遺構は検出できなかった。その後調査トレンチの北東隅と南東隅で断ち割りを行い、土石流と見られる黄褐色を基本とする砂礫・粗砂の堆積を約0.7mの深さまで確認しているが（第12～17層）、やはり遺構、遺物は確認されなかった。

4　出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ１箱で、大半は先述した遺物包含層である第６～９層出土のもので占められ、他に耕作土・床土出土の近世遺物がある。出土した遺物はいずれも小片ばかりで、図化できるものは極めて少ない（第13図）。

１は土師器で唯一図化できた中世の小皿で、直径約８cm、器高1.1cm、口縁部のみナデ調整する。２・３は長岡京期須恵器蓋で、２は直径13.4cmの端部片、３は直径2.2cmのつまみである。４も長岡京期須恵器杯Ｂの高台片で高台径は11.4cmである。５は古墳時代須恵器杯身の受け部片で、口縁基部での口径は14.0cmに復原される。６は長岡京期須恵器壺M底部片で、内部にはロクロ水挽き痕、底部外面には静止糸切り痕を残す。高台径は6.2cmである。７・８は中世須恵器鉢の



第13図　出土遺物実測図（1/4）

付表－２　出土遺物破片計数表

第６層　灰色砂質土

器種	器形	破片数	比率（%）		全体比
土師器	供膳形態	203	98.1%	56.3%	28.3%
	煮沸形態他	4	1.9%		
	小計	207	100.0%		
須恵器	供膳形態	8	12.7%	17.1%	8.6%
	貯蔵形態他	55	87.3%		
	小計	63	100.0%		
瓦質土器	椀・皿	82	96.5%	23.1%	11.6%
	羽釜	3	3.5%		
	小計	85	100.0%		
黒色土器	椀・皿	0		0.0%	0.0%
緑釉陶器	椀・皿	3		0.8%	0.4%
灰釉陶器	椀・皿	0		0.0%	0.0%
青磁	椀・皿	2		0.5%	0.3%
白磁	椀・皿	6		1.6%	0.8%
瓦		2		0.5%	0.3%
計		368		100.0%	50.3%

第７層　灰オリーブ色粘質土（第８層含む）

器種	器形	破片数	比率（%）		全体比
土師器	供膳形態	131	91.6%	61.4%	19.5%
	煮沸形態他	12	8.4%		
	小計	143	100.0%		
須恵器	供膳形態	14	60.9%	9.9%	3.1%
	貯蔵形態他	9	39.1%		
	小計	23	100.0%		
瓦質土器	椀・皿	60	98.4%	26.2%	8.3%
	羽釜	1	1.6%		
	小計	61	100.0%		
黒色土器	椀・皿	1		0.4%	0.1%
緑釉陶器	椀・皿	1		0.4%	0.1%
灰釉陶器	椀・皿	1		0.4%	0.1%
青磁	椀・皿	0		0.0%	0.0%
白磁	椀・皿	3		1.3%	0.4%
瓦		0		0.0%	0.0%
計		233		100.0%	31.8%

第９層　褐色砂礫土

器種	器形	破片数	比率（%）		全体比
土師器	供膳形態	103	94.5%	83.2%	14.9%
	煮沸形態他	6	5.5%		
	小計	109	100.0%		
須恵器	供膳形態	2	16.7%	9.2%	1.6%
	貯蔵形態他	10	83.3%		
	小計	12	100.0%		
瓦質土器	椀・皿	9	90.0%	7.6%	1.4%
	羽釜	1	10.0%		
	小計	10	100.0%		
黒色土器	椀・皿	0		0.0%	0.0%
緑釉陶器	椀・皿	0		0.0%	0.0%
灰釉陶器	椀・皿	0		0.0%	0.0%
青磁	椀・皿	0		0.0%	0.0%
白磁	椀・皿	0		0.0%	0.0%
瓦		0		0.0%	0.0%
計		131		100.0%	17.9%

口縁部である。いずれも端部を肥厚させて断面三角形に仕上げる。９は平安時代緑釉陶器小型段皿の口縁部小片で、端部はわずかに外反し、内面には沈線を巡らす。素地は軟質で黄灰色を呈し、内外面に施された釉は薄い緑灰色である。10は瓦質土器の三足羽釜の脚部で、直径2.0cm、胎土は黄灰色で外面は黒灰色を呈する。11・12は中世瓦器椀の小片である。11は口縁端部内面に沈線を有し外面は不調整。内面は摩滅のため調整不明である。12はかろうじて口径11.6cmに復原できたもので、摩滅が激しく口縁部の横ナデのみ確認される。13は青磁碗の底部片である。削りだし高台の直径は5.2cm、素地は青灰色を呈し、淡緑灰色の釉は高台内面を除く内外面に施される。１・５・７・８・12・13は６層、３・４・９・11は７（８）層、２・６・10は９層出土である。

図示した以外の遺物のうち第６～９層出土遺物は付表－２に破片数で示している。これ以外の遺物は、耕作土内から染付磁器等が５片、床土からは土師器片などが２片出土している。

第６～８層では土師器が最も多く、次いで瓦質土器、須恵器となり、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁、瓦片が少数含まれる。第９層では同じく土師器が多いが、須恵器が比率で瓦質土器を上回り、他の遺物は出土していない。第６～９層の総出土破片数は732で、比率は、土師器62.7％、須恵器13.4％、瓦質土器21.3％、黒色土器0.1％、緑釉陶器0.5％、灰釉陶器0.1％、白磁1.2％、青磁0.3％、瓦0.3％となる。

5　まとめ

今回の調査では、当初検出が予想された遺構については確認する事はできなかった。しかしながら包含層内からは古墳時代、長岡京期、平安時代、鎌倉時代の各時代の遺物が小片ながらも出土している。包含層の状況は水田構築のための盛土と見られ、これら水田の開墾時期を知る上での一つの目安となるものといえよう。包含層内では中世遺物の占める割合が多く、この時期に丘陵部の水田化が進められたと考えることもできよう。今回確認された灰色砂質土の包含層（第６層）は、平野部で認められる瓦器などを含む中世包含層に似たものであり、その意味でも共通性が見出せる。ただ広い水田地帯の極めて狭い範囲での状況でもあり、可能性を指摘するにとどめておきたい。またこれら包含層がどこから運び込まれたかも問題となろう。棚田を構築するにあたっては削平や盛土など大規模な土の移動が行われたものと考えられるが、平野部からかなり奥まった土地でもあり長距離の移動は考えにくい。したがって包含層に含まれた遺物は周辺の状況を反映した可能性もあろう。だとすれば古墳や、長岡京期の遺構、あるいは謎の多い海印寺関連の遺構が近くに存在した可能性も考えられるが、先にも述べたように限られた範囲での調査結果でもあり、今後の周辺での調査を待つこととしたい。

注１）山本輝雄「奥海印寺遺跡第６次調査概報」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年
２）原　秀樹「奥海印寺遺跡第13次調査概報」『長岡京市センター年報』平成20年度　2010年
３）山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭」『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号　1986年
木村泰彦「奥海印寺遺跡第４次調査概要」『長岡京市報告書』第20冊　1988年

付表－３　報告書抄録

ふ り が な	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	長岡京市文化財調査報告書
副 書 名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第５５冊
編 著 者 名	小田桐淳、岩崎　誠、木村泰彦
編 集 機 関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10－１

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 伊賀寺遺跡	長岡京市下海印寺下内田 5-1、6-1	26209	107 96	34° 54′ 43″	135° 41′ 25″	20090610 ～ 20090818	160㎡	遺跡確認調査
長岡京跡 友岡遺跡	長岡京市調子一丁目13	26209	107 97	34° 54′ 32″	135° 41′ 49″	20090713 ～ 20090721	30㎡	遺跡確認調査
西代遺跡	長岡京市奥海印寺西代10	26209		34° 55′ 24″	135° 40′ 12″	20090518 ～ 20090603	105㎡	遺跡確認調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 伊賀寺遺跡	都　城 集　落	長岡京期 縄文時代中・後期	集石墓、土坑	須恵器 平玉未成品、石鏃、石棒、磨石、叩石、異形局部磨製石器	縄文時代後期に平玉を製作していた集落を確認。
長岡京跡 友岡遺跡	都　城 集　落	長岡京期 古墳・鎌倉・江戸時代	柱穴、土坑	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、銅製品	江戸期の開墾跡、古代の柱穴などを検出。
西代遺跡	散布地	古墳時代 平安～中世		土師器、須恵器、陶磁器	新たな遺跡を確認。

※緯度、経度の測点は調査区の心で、国土座標の旧座標系を使用。

図　　版

（1）１トレンチⅡ面全景（西から）

（2）１トレンチの土層－床土層と第２層（南から）

（1）１トレンチⅢ面全景（西から）

（2）１トレンチの土層（南から）

（1）２トレンチⅡ面全景（東から）

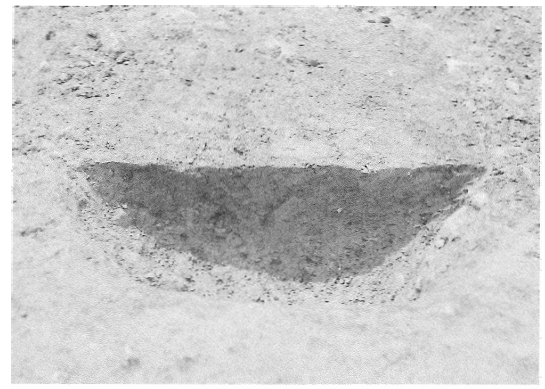
（2）２トレンチの土層（南から）

（1）２トレンチⅢ面全景（西から）

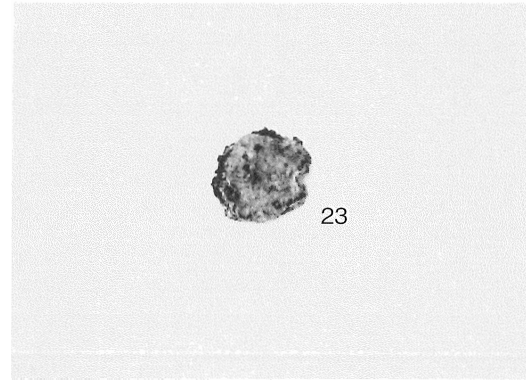
（2）２トレンチの土層―地山礫層の落ち込み（南から）

（１）調査地全景（南西から）

（２）調査区全景（南から）



（３）柱穴Ｐ１（北から）



（４）出土銅製品

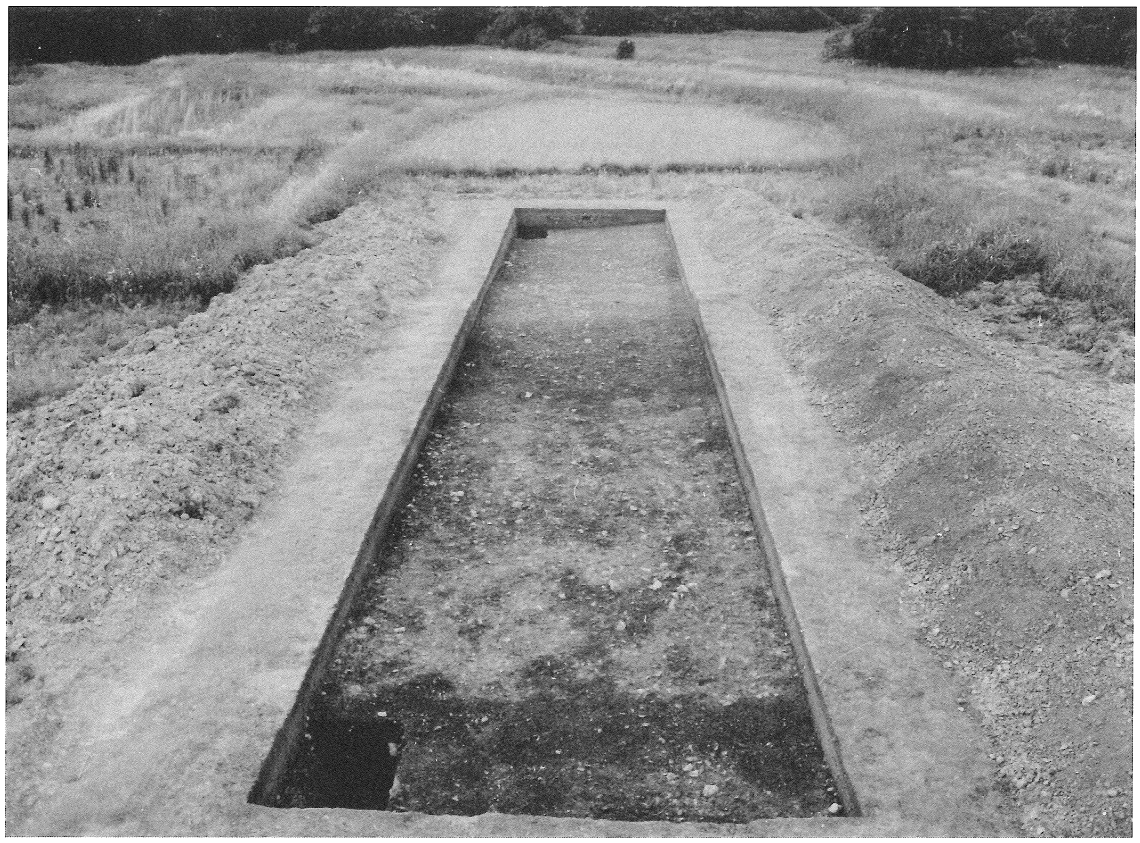
（１）調査地遠景（南から）

（２）調査地全景（北東から）

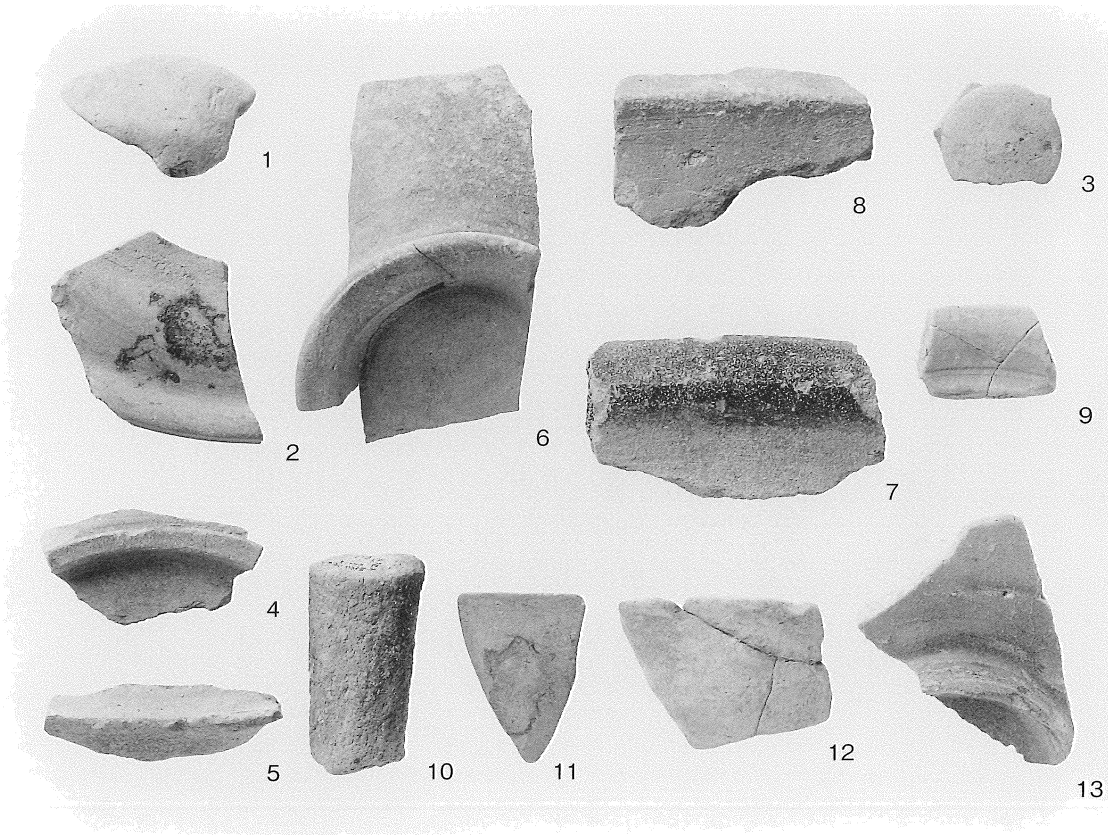
（１）調査地全景（北西から）

（２）調査トレンチ全景（南から）

西代遺跡第１次調査



（１）調査トレンチ全景（北から）



（２）出土遺物

長岡京市文化財調査報告書　第55冊

平成22（2010）年３月26日　印刷
平成22（2010）年３月31日　発行

編　　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622　　FAX　075－951－0427

発　　行　長岡京市教育委員会
〒617－8501　京都府長岡京市開田一丁目１番１号
電話　075－954－3557　　FAX　075－954－8500

印　　刷　株式会社　図書印刷　同朋舎
〒600－8805　京都市下京区中堂寺鍵田町２
電話　075－361－9121　　FAX　075－371－0666